

## 昭和49年度日本気象学会奨励金受領者

表記奨励金の受領候補者は各支部から計6名の推せんがあったが、受領者として次の3会員を決定し、11月8日秋季大会の席で奨励金が授与された。受領者およびその理由は次のとおりである。

### 矢野兼三会員

矢野会員は研究歴は若いですが、福岡、種子島などのレーダー観測資料から多重線状エコーの構造を大気成層条件および中間規模、中規模の気象じょう乱と関連させて解析し、明らかにしようと努力してきた。今後の研究計画としてレーダー・エコーの諸特性をじょう乱の特性および不安定理論と関連づけて発展させようと念願している。

本研究はレーダーによる雨量予報の精度向上のみならず、じょう乱の生成、発達、消滅に対する新しい知見を提供する可能性を持っており、本研究の発展が気象学のこの分野の進歩に寄与することの大きいことを期待してここに奨励金を授与する。

なお、今回は他に研究費を得る可能性があるため、奨励金授与の対象から外した豪雨ワーキング・グループが同一職場にいたので、このグループと密接な連携のもとに研究が遂行されることを期待したい。

### 内山文夫会員

長野県北部の大雪は北陸地方の豪雪の条件とは異なり、その予報には総観規模の現象に着目するだけではきわめて不十分である。内山会員は従来の方法に加えて、長野県及び隣接県の詳細な地上気象観測資料を用い中規模現象が長野県北山間部の降雪を左右することを見出した。今後、さらに高地を含む県内各地に気圧、気温、風、雨などの日記観測網をはり、観測、解析を行い、そ

の詳細を明らかにする計画をたてている。

内山会員は研究環境に恵まれない地方気象官署で長年にわたってこの問題に取り組んで来た中堅技術者であるが、本研究の発展を援助激励するため、ここに奨励金を授与する。

### 樫間道夫会員

带状エコーが北陸地方の集中豪雨と密接な関連があるらしいことは弥彦山レーダーによる観測で推定されているが、その発生過程についてはルーチン観測のみでは確められない。そこで樫間会員は過去の解析研究によって得た成果の上立って、総観場から発生可能な状態を推定し、臨時観測を行うことによりその発生過程をとらえ、発生源となる Source disturbance との関連を明らかにする研究を行う計画である。

この研究に関連する現象は日本海に面する地域に共通する現象である。それゆえ、本研究には弥彦山レーダーのみでなく、秋田、福井、松江などの各レーダー基地官署との協同研究観測が極めて重要であろう。また、その解析研究も Source disturbance の性質及び構造と結びつけて行う必要がある。

学会としては、上にあげたレーダー基地官署の会員ならびにこの問題に興味を抱いている会員との提携を保ち、協同研究にまで発展することを期待して奨励金を授与する。

## 「天気」の表紙の図案について

あたらしい表紙になってから2年目の第1号の「天気」をお届けします、ご存知のように20巻までの表紙も親しみやすいものでしたが、昨年21巻になったのを機会に改めてみました、いかがでしょうか。デザインの機能的な意図は本号までの13号分を本棚に並べてご覧になれば、おわかりいただけると思います。色は赤系から青系へと巻ごとによってゆきます。図柄は単純ですが「地上から大気層を探る」という意味にもとれそうです。

「天気」とは本来そのような語感をもっています。人工衛星や電子計算機によって「大気」への視点は多角化しましたが空を仰ぎみるという直観的な感覚はつねに大切にしたいものです。

このデザインは編集委員の竹田さんの案によるもので、図案家の故熊谷年郎氏に見てもらいました。

(編集委員会)